

Title	ヨーロッパ彫刻家のシンポジオン
Sub Title	Symposion europaischer Bildhauer
Author	飯田, 善国(lida, Yoshikuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.107- 117
JaLC DOI	
Abstract	Der Osterreichische Bildhauer Karl Prantl grundete im Jahre 1958 das Symposion Europaischer Bildhauer im Steinbruch von St. Margarethen im Burgenland. Diese Bewegung stimmt mit der Tendenz der gegenwart uberein und innerhalb von einigen Jahren hat sie sich in der ganzen Welt verbreitet. Dieses Essai schreibt uber die Entwicklung und das Wesen der Idee des Symposions Europaischer Bildhauer.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーロッパ彫刻家のシンポジオン

Symposion Europäischer Bildhauer

飯 田 善 国

Yoshikuni Iida

Resümee

Der Österreichische Bildhauer Karl Prantl gründete im Jahre 1958 das Symposion Europäischer Bildhauer im Steinbruch von St. Margarethen im Burgenland. Diese Bewegung stimmt mit der Tendenz der gegenwart überein und innerhalb von einigen Jahren hat sie sich in der ganzen Welt verbreitet.

Dieses Essai schreibt über die Entwicklung und das Wesen der Idee des Symposions Europäischer Bildhauer.

Symposion Europäischer Bildhauer と名付けられる、彫刻家の運動がヨーロッパの一角で始ったのは、1958年である。この運動の発案者・推進者は、厳格なカトリック教徒であるウインの彫刻家 Karl Prantl カール・プラントルであった。プラントルは、ヨゼフハイドンの生地として名高い Eisenstadt アイゼンシュタットの近くで生れ (1923 年)、その後ウインの美術学校で油絵の勉強をした。アイゼンシュタットを首都とするブルゲンライド地方は、ウインの南に位置し、ハンガリーと国境を接する気候温暖、ゆるやかな丘陵の起伏する乾燥した土地であり、良質のブドウ酒を産し、殊にノイシートラ湖——この湖の南半分はハンガリー領に属する——の沿

岸は夏季乾燥し、明るい太陽に恵まれ、頗る上等の白ブドウ酒を産する。この湖の西岸に、ルスト称する小さな町があるが、この町は家々の屋根にコーノトリが巣を作って群棲しているので有名である。このルストの町から3キロメートル程西、アイゼンシュタットから8キロメートル程東に、Sankt Margarethen サンクト・マルガレーテンと称する古い石切場がある。この石切場は既に中世の時代から、良質の石灰性砂岩の産地として知られ、ウインの最高最大のゴシック教会であり、オーストリア・ゴシックの傑作として史上に名高い Sankt Stefan サンクト・ステファンの教会も、この石切場から産出した石灰砂岩によって構築されたのである。この石切場は現在もなお、石切場としての産出活動を維持しており、フンメルと称する人物の所有となって、10人程の石工達が、原始的な方法によって、石を截り出している。アイゼンシュタットを含むブルゲンランド一帯は、もとエステルハツイ家の家領であったが、このエステルハツイ家の館は現在もアイゼンシュタットに残っており、その広大な邸宅の一部は、造型芸術家のアトリエとして、ブルゲンランド出身の芸術家に無料公開されている。ブルゲンランド生れの彫刻家である Karl Prantl カール・プラントルは、1956年頃からこのエステルハツイ家のアトリエで石彫の仕事をしていたのだが、サンクト・マルガレーテンの石切場から8キロも離れているアイゼンシュタット迄石を運ぶのは、仲々の難事であったので、大作を造る時には石切場へわざわざ出向いて、青空の下で太陽の真射にさらされ乍ら仕事するようになった。この石切場で大作の石彫に打ち込んでいる間に、一つの理念が電光となって彼の脳裡に閃くことになる。「自国や外国の彫刻家達を此処に招いて、共同の生活をし、共同の場所で互に刺激し合い乍ら製作したら、素晴らしいだろう!」

斯る発想は、平凡にして非凡、非凡にして平凡である。カール・プラントルの偉大さは、斯る発想を、夢想に終らせず、実行に移した点に在る。ここに行動家としてのプラントルの非凡性が現われる。斯る理念を思い付

かせたものは、カトリック教の理想主義と、ゴッホ等によって夢想された芸術家の理想主義との混交であったに違いない。プラントルは直ちに行動に移った。彼はアイゼンシュタットの州政府や地方の金持を動かして若干



Karl Prantl

の基金を捻出させ、石切場の所有主 Hummel 兄弟を説いて、1958 年、数人の彫刻家を招いて小規模乍ら、世界最初の「彫刻家のシンポジウム」を発足させた。ウインの美術批評家や詩人のウオン夫人、社会学者のチャガン博士らの側面からの精神的援助が彼の心の支えとなった。制作の現場を公開した事が土地の人々や観光客の好奇心をいたく刺激し、噂は一日一日とひろまって、見物客が列をなして石切場へ押しかけるようになった。こうして第 2 回シンポジウムの開催を容易にさせ、その規模もふくれ上って行くこととなる。州政府は、石切場で開かれる彫刻家のシンポジウムが、ブルゲランド地方の観光政策に魔術的影響を与える事実を悟り、進んで資金を提供する様になったし、石切場の所有主フンメル兄弟は、シンポジウムの成功が、彼等の商売にプラスする事実を識って、前より一層積極的に協力する様になった。

第 2 回のシンポジウムは更に大きな反響を呼び、参加者も 10 名にふえ、参加者の国籍も、オーストリアの他に、フランス、ユーゴ、日本、イスラエル、ドイツと国際的ひろがりを加え、名の示す通り「ヨーロッパ彫刻家のシンポジウム」の実体を備えるに至った。ウインのラジオや新聞が進んで反響を伝えるだけでなく、オーストリアの国境を越えて、ヨーロ

ヨーロッパ諸国へ反響が伝わって行くことになる。

忘れない内に此処に書き記しておかねばならない事がある。「ヨーロッパ彫刻家のシンポジウム」に最初に参加した日本人は、当時既に巴里に在住していた Yasuo Mizui 水井康夫君であったと言う事である。彼が日本人として最切に参加した感激は、後に、1963年に朝日新聞主催で真鶴海岸で開かれることとなった「国際彫刻家のシンポジウム」として実現する

事になる。これは極東に於る最初の「彫刻家シンポジウム」として記念さるべきものである。

1959年の、サンクト・マルガレーテンに於る「ヨーロッパ彫刻家シンポジウム」は種々の意味で記憶さるべきものとなった。その一は参加する彫刻家の国籍が、その標榜する所にふさわしくヨーロッパ各国にまたがるに至り、名実共に国際的性格を帯びるに至ったこと。その2は、各国の優れた新進彫刻家に参加するに至った為、その反響は、オーストリア国の国境を越えて、汎ヨーロッパ



Karl Prantl の作品
(ベルリンの彫刻シンポジウム出品)

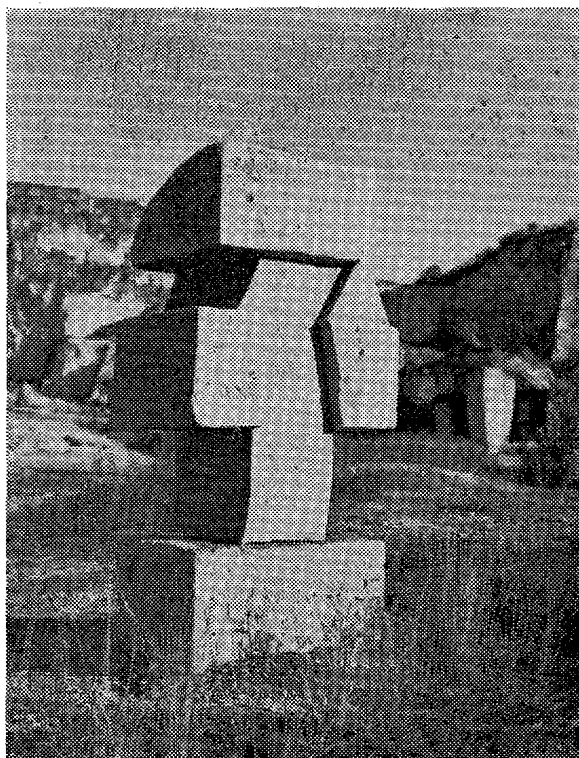
的なものになり始めたこと。その3は、これに参加した各国の彫刻家達が、その理念を自分の国へ持ち帰り、それぞれの国に、「国際彫刻家のシンポジウム」を開くための運動を始めたこと。その4は、抽象彫刻は「判り難いもの」と決めて、近づこうとしなかった大衆に、制作の現場を公開することによって、抽象彫刻理解へのキッカケを与えただけでなく、芸術家と公衆との人間的接触を通じて、公衆に対しては芸術家の抱く理念の無償性を、芸術家に対しては公衆の裡に内在する可能性と人間性の価値を教

える結果をもたらしたこと。その5は、巨大な石彫を野外や丘陵にならべることによって、風景、ひいては土地の性格そのものが変ることを人々が認識したこと。その6は、芸術家同志の共同生活によって、新しい友情が芽生えることもあり、新しい敵意が生れることもあると言う発見である。エトセトラ。

「彫刻家シンポジウム」の創立者 Karl Prantl カール・プラントルには、創設者に通有のいっこくな激しい情熱と、理想を追う人間に内在する不寛容の精神が分ち難く結び合っていた。彼のかかる性格が、シンポジウム創設に伴う種々の困難を克服させたのであり、後にシンポジウムが国際的なひろがりを持つに至った時、彼を孤立させる原因となるのである。併し彼の性格の純粹さが持つ魅力は、彼の欠点をおぎなって余りあるのであって、その上、彼が創設者としての卓見と情熱、彫刻家としての非凡な創造性を併せ持っている事を考えるならば、彼が一個の人物として魅力ある存在である事実を人々は納得することであろう。

1958年と1959年の参加者の中から「国際彫刻家のシンポジウム」の理念を、各々の国へ移植する人々が現われる。ユーゴスラヴィアの彫刻家 Savincek サビンセック、西独——西ベルリンの彫刻家 Reischke ライシュケと Baumann バウマン、日本の Mizui 水井康雄等である。これらの人々は、カール・プラントルの理念に共鳴し、喜んでその使徒となったのである。斯して Savincek サビンセックは1960年にユーゴとイタリアのトリエステ地方の国境に近い、風光すぐれたポルトローゼの海岸に、ユーゴ最初のシンポジウムを、Reischke ライシュケと Baumann バウマンは西独の Kirchheim キルヒハイムと Berlin ベルリンに夫々ドイツ最初のシンポジウムを Y. Mizui 水井康雄は1963年に日本の真鶴に、シンポジウムを開催することとなる。

筆者がサント・マルガレーテンのシンポジウムに参加したのは、1961年の夏であった。その数ヶ月前、つまり1961年の5月に世界で最初



Yoshikuni Iida の作品

の「鋼鉄彫刻のシンポジウム」が Karl Prantl カール・プラントルのイニシアチヴによって、ウインの西南150軒の小さな町 Kapfenberg カップフェンベルグ、の製鉄会社Böhlerベーラー社の後援で、同社の工場内で開かれた事実はあまり知られていない。それはカップフェンベルグの町がウインから遠く離れていたこともあり、カップフェンベルグの文化祭と言う地方的なモヨオシの枠に規定された為もあったが、参加した彫刻

家の大部分がオーストリア人であった事も、此のシンポジウムを地方性の中に限定づけるのに役立ったのである。註（参加者は全部で8名、7人はオーストリア人。たった1人の外国人参加者は他ならぬ筆者であった。）

筆者とカール・プラントルの交際は、1959年頃から始ったのだが、その頃私は未だ彫刻家として立つ決心を固めていなかった。油絵に興味を失って、既に1年以上カンバスに向っていなかった。謂わば混迷の時期であった。その頃、私のデッサンを見て、彫刻をはじめよう、しきりと奨めたのがカール Karl であった。1961年の2月、偶然のことからウインのコーラージュ劇場で、シモン・ヴィンツェルベルグの三幕物の芝居「カタキ」の主演を演じ、ウイン劇界にセンセーションをまき起した為、私の名は「俳優」として有名になった。カールは、私の成功を心から喜んで呉れたが、私が生涯を俳優としておくる気の無い事をつとに見抜いていた彼は、「カタキ」の長期公演がまだつづいていたある日、劇場の楽屋にやって来て、「Yoshi、気が向く様なら、カップフェンベルグの鋼鉄彫刻シンポジウム

に参加しないか?」と誘って呉れたのである。私は勿論、喜んで参加を約した。ウインの公演終了後、「カタキ」は更にインスブルックの市立劇場、ミュンヘンのオデオン座、更に北ドイツ、ウェストファレン州のイザーロンなどに招かれた為、私がカップフェンベルグの「鋼鉄彫刻のシンポジウム」に参加したのは、当のシンポジウムが始って2週間程経過したあとであったが、生れて始めて、シンポジウムに参加する感動、生れて始めて鋼鉄の巨大な彫刻を造る感激に、心は昂ぶっていた。シンポジウムの内容と意義を、その内部に生きることによって、始めて理解し体得したのであった。

「鋼鉄彫刻のシンポジウム」は、「石の彫刻のシンポジウム」とは異った性格を持っていた。それは、鋼鉄と言う自由な可塑性を持った材質から必然的に生れて来る近代的な性格、及び製鋼所というダイナミックな場所で制作する為に生ずる心理的な刺激である。「工場」と「石切場」と言う2つの異った言葉から連想される対照的な感覚を思い浮べるだけで充分であろう。一方は古代の原始的であり、他方は近代的都会的である。この両者の相異は、夫々の場所で開かれるシンポジウムの性格と構造を規定し、夫々の作品の内容と形式を方向づけることとなる。

「鋼鉄彫刻のシンポジウム」は、更に1つの重大な問題を提起したのである。即ち企業と芸術家の協同の可能性、協同の種々相についての考察、及び企業は芸術家を通して、芸術家は企業を通じて如何に社会と結び付き得るか。

カップフェンベルグの「鋼鉄彫刻シンポジウム」はドイツ及びイタリア^{*}に、影響を与えたけれども、広く世界に知られる迄には至らなかった。それは記録としてのカタログを作らなかった事も一つの大きな原因である。資金的にカタログを作るユトリが無かったのである。

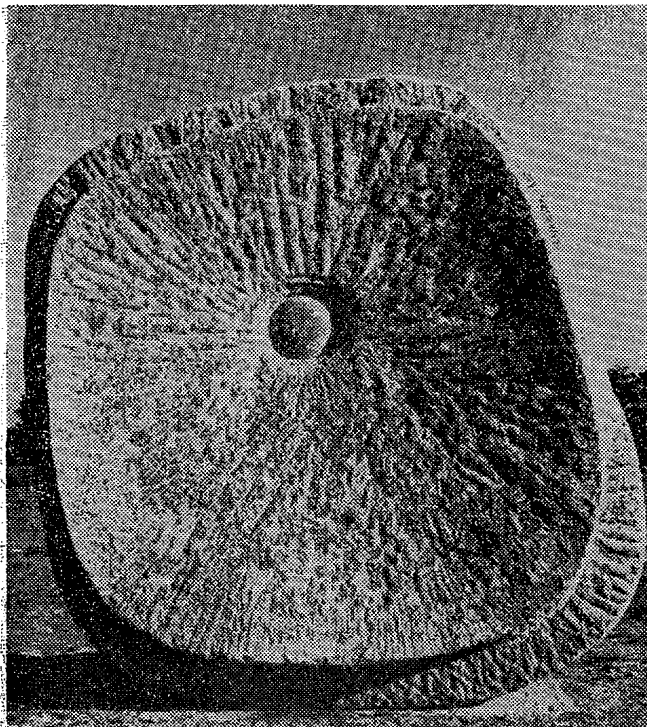
^{*}(註) その後イタリアのスポレットで鋼鉄彫刻のシンポジウムが開かれた。

カール・プラントルがサントマルガレーテンの石切場で始めた「彫刻家のシンポジウム」は Symposion Euroäischer Bildhauer と呼ばれて

いるが、それは前述した人々によって、ユーゴ、西ドイツ、ベルリンへと広められて行ったばかりで無く、1963年には日本で、チェコスロヴァキアで、カナダで夫々開かれ、1965年にはアメリカ合衆国の西海岸の大都市、ロサンゼルス・ロングビーチでも開かれるに至った。ユーゴのシンポジウムに至っては、国家的事業として、ポルトローゼ(石彫)及びコスタニヴァツァ(木彫)で1960年以来、今日迄毎年休止する事なく続けられており、夫々壮大な野外美術館が建設されるにいたった。

(註) ユーゴの国際彫刻シンポジウムは「Forma Viva フオルマ・ヴィパ」と名付けられ、現在迄に多数の日本人彫刻家が参加した。亦1967年夏にはフランスのグルノーブルでも開かれたと聞いている。

筆者は、1960年春のカップフェンベルグに於る「鋼鉄彫刻のシンポジウム」の後、引き続き1961年夏、サンクト・マルガレーテンの「石彫シンポジウム」に招待されて参加し、更に1963年夏のユーゴスラヴィア



Herbert Baumann バウマンの作品
(ベルリンのシンポジウム)

に於る「木彫シンポジウム」に、又同年秋のベルリンに於る「石彫シンポジウム」に参加、シンポジウムを通じて彫刻家としての自己形成をしたのである。従ってシンポジウムに於る体験は私の生涯の重要な里程碑となって刻印されたのである。

カール・プラントルによって理念と運動の基礎を置かれた「彫刻家シンポジウム」は時代の要求と合致した為、ヨーロッパのみならず北米カ

ナダから極東に迄運動の翼をひろげる事になったけれども、此の運動はその発生の初めから、抽象彫刻に方向を与えようとする芸術運動の性格と、芸術家が社会に向って抽象彫刻を理解させようと働きかける生活運動の性格との混合である。理想の根底に在る2つの柱は、芸術家が共同生活を通じて互の芸術と人間を理解し合おうとする欲求、及び、制作の現場を公開する事によって社会と芸術の結び目を作ろうと意図したこと、これである。つまり、様式の拡散に向いつつある現代彫刻に一つの中心を与えようとする希求、技術と感覚の些末的探求に浮身をやつしている現代彫刻に、原始的な大きさと安らかさを取返そうとする希望、あの偉大な時代の古代人たちが持っていた、素材との本能的対話、宇宙の根源へ還ろうとする衝動、彫刻が、芸術として以上の、より深い意味と係り合いを生活に持っていた時代の、あの深い力を取り戻そうとする希い、素材と自然への畏敬の心、そして小さな共同体の中で、人間の魂の故郷を再発見しようとする欲求、それらの複雑なからみ合いの中に、この運動の本質が在る。そして、「石」という素材を、「石切場」と云う原始的風景の中で刻む過程で、自然に、彫刻家達は、古代の巨石文化への憧憬を目ざめさせて行った様に思われる。

ゆるやかな丘陵の起伏する、ひろびろと、解放される空間に充たされた、爽なブルゲランド地方の大自然の中に、最初の「国際彫刻家シンポジウム」が開かれた事は、幸せな事であった。「彫刻家シンポジウム」は「人間」と「土地」(環境)との関わり合いの中に、本質を発見して行く行動なのである。その叙事詩的な性格は、そこから生れるのである。出来上った作品を発表する事は、目的ではない。その制作・生活・行動の全過程が目的なのである。従って、彫刻家の集団と、素材と、その土地とのからみ合いの運動過程で、それは高揚された叙事詩とも成り、卑俗な喜劇とも成る危険にさらされている。

古代の神々が未だ死に絶えていず、掘り起す石塊の中から眠れる神々の姿が立ち現れる予感を含んでいるサンクト・マーガレーテンの石切場に生

み落された Symposium Europäischer Bildhauer は、未知の予感の中からひとつの歴史を創造したのである。丘陵の上に点々と置かれた沈黙の石のモニュマンは、自然と人間が、此の不幸な時代にも、未だ和解できる事を証している様であり、二度と還らぬ黄金時代への惜別と動哭に堪えて佇立している様でもある。この土地の風景の持つ、本来の偉大な性格の上に、石彫群は、悠然たる人間的アクセントを与えている。それらは未来都市の墓場であり、人間の理想の勝利と敗北の記念碑である。

実際に Symposium Europäischer Bildhauer には、ヨーロッパ各国彫刻界の若きエリートが進んで参加したため、ヨーロッパ現代彫刻史に1頁を画する事業を成しとげたのだが、社会に対しては、公衆が難解なものとして近寄ろうとしなかった描象彫刻を身近なものとして受け容れる心理的基盤を作ることに役立った。これは啓蒙的側面として見落す事の出来ない功績である。

1966 年初春、筆者が東京でハーバード・リード卿に会った時、彼はサンクト・マルガレーテンを訪れて感銘を受けたと語ったが、ヨーロッパの多くの美術批評家が、サンクト・マルガレーテンを訪れ、そして Symposium Europäischer Bildhauer に就て言及した。サンクト・マルガレーテンはオーストリア人にとって今や1個の聖地の如きものとなり、観光バスが訪れる名所のひとつになってしまった。これらの理念の具現者・実行者としてのカール・プラントルの名声は、オーストリア、ドイツを通じ古典的なものとなりつつある。1967 年 2 月、彼はニューヨークの Staempfli 画廊で個展を開き彼の作品のユニークな価値はニューヨーク美術界に強く印象づけられたのである。

1969 年の夏から秋にかけて、日本鉄鋼連盟の主催による大規模な「鋼鉄彫刻の国際シンポジウム」が大阪を中心に開かれることが決まり、目下その準備が進められつつある時、この運動の沿革に就てその概略を述べる事を必要と認めて筆を執った。壮大な規模と新たな構想の下に開かれる

1969 年の「国際彫刻家のシンポジウム」が現代彫刻の新しい展開に一つの暗示を与えるものであれば幸である。

(彫刻家)

附記 1. 本稿は「国際文化」166 号に掲載されたものであるが、国際文化振興会の好意により転載を認めて頂いたことをここに附記します。

2. 日本鉄鋼連盟、毎日新聞社共催により1969年秋大阪で開かれることに決定した「鋼鉄彫刻のための国際彫刻家シンポジウム」は EXPO-70 に正式参加することがきまり、制作された作品は建築家前川国男、丹下建三両氏の手によって EXPO-70 の会場に構成陳列されることとなった。

因に参加全作家は15名、ヨーロッパ、アメリカ11人、日本4名である。